

クローズアップ NGO・NPO

一般財団法人

アジア・アフリカ国際奉仕財団 (AIV)
事務局スタッフ 上岡 学正

インドと日本を結ぶご縁 —AIV設立の背景と事業を中心に—

■ ハンセン病患者救済活動から ■ 広がった活動の輪

インド北部のアグラに、日印の政府間協定によりハンセン病救済センター「JALMA (ジャルマ)」が設立され、日印の医師、職員が協働でハンセン病患者の治療・救済にあたることになりました。西国第六番札所壺阪寺先代住職、故常盤勝憲和尚はこの活動に賛同し、裏方として職員の派遣や物資などの支援活動を1965年から開始しました。

1977年に、このハンセン病患者救済活動、ならびにセンター運営などがインド政府に移譲されることになりました。その際、酷暑のインドにおいて日印の医師、看護師、事務員などの多くの人々が活動に参画した活動であり、日本にとりましても戦後初めて行った民間奉仕事業であったことから、この活動を後世に語り継ぐための大きなモニュメントのアイデアが浮上してまいりました。そのモニュメントは、今後の私たちの活動を見守り、導いていただけることを祈念して、大きな石像の観音様に決定しました。観音様の製作は、インドの文化勲章受章者のシェノイ氏が担当することになり、部材の石を採掘する山の提供にはインド政府の協力をいただき、南インド・カルカラに決まりました。

大観音様の身の丈は18m、台座は2mの巨大なものであることから、66個の部材に分けて彫刻され、組立・建立は日本が担任することになり、壺阪寺境内にその地を求めることになりました。製造期間は約5年に及びました。救済活動のご縁



大観音石像 (1983年開眼)

で始まった日印の交流が大きな石像文化のご招来になっていきました。

この間も日印の交流はインド各地に広まり、先述のハンセン病救済センターの初代インド人院長デシカン博士の夫人であるデシカン女史がセンターの敷地の横で始めたロパ・ムドラ学校に校舎を寄贈するなど、交流が盛んになっていきました。1983年に大観音石像が完成し、ますますアグラのロパ・ムドラ学校へのホール寄贈、インド人医師の日本留学への助成など、さまざまな助成活動が促進されていきました。また、中央インド・ワルダールにおいて、ハンセン病患者の女性たちのリ

ハビリテーションセンターを開設するなど、その活動の輪が拡大していきました。

AIVの設立と事業

その途上、1988年に勝憲和尚は遷化しましたが、インドでの支援を継続、より発展させていくため、1989年にアジア・アフリカ国際奉仕財団（以下、AIV）が設立されました。現在ではインド5地域（アグラ、ベンガルール、ボパール、ムンバイ、カルカラ）、アフリカ1地域（ウガンダ）で以下のような支援活動を行っています。特にAIVは「子どもたちの教育」に対する支援に力点を置いています。

（1）教育支援事業（アグラ、ウガンダ）

AIVは壺阪寺とご縁の深いロパ・ムドラ学校に対し、新校舎や職員室・ゲストルームの建設事業、幼稚園・低学年用校舎増改築事業といった学校の教育環境整備を行ってきました。校舎などの整備・修繕をしながら、①授業料を支援することによる学内奨学金制度への助成 ②放課後補習クラスの開設運営を支援 ③職業訓練コースの開設運営支援を続けています。

一方、ウガンダの支援先であるンゴビヤ学校には、エイズや病氣、事故などによる孤児や生活に困窮している子どもたちが多く通っています。1994年に、この学校を訪れた1人の日本人の方の紹介がきっかけとなり、毎年、給食費や教科書代といった学校運営助成を続けています。

（2）現地NGO助成事業

インド南部ベンガルールにおいては元ハンセン病救済センター医師のご夫妻によって運営されている現地NGO団体に対して活動金を助成しています。同団体はカーストや宗教、言語、人種、性別に関係なく、貧困層や支援の行き届きにくい地区の児童養護施設や障害者施設などに対して奨学金制度の運用や日用品などの提供活動を行っています。インド中部ボパールにおいては地域の障害者の自立支援を促す活動をしている団体に対して視覚障害者用のパソコンを贈るなどの支援を行っ

てきました。

（3）日印わらべうた交流事業

奈良県にある国際協力団体としてAIVは、同県を中心に活動しておられる「まつぼっくり少年少女合唱団」（荒井敦子先生主宰）と協働して、日印のわらべうたを通じた交流事業「奈良まつぼっくり&ロパ・ムドラ学校わらべうた交流」を昨年から始めました。交流を深めていくと、日本とインドのわらべうたや歌遊びには共通する点のあることがわかりました。日本の「ハンカチ落とし」や「だるまさんが転んだ」と同じような遊びがあり、その細かいルールなどには違いがあるようですが、遊び方はとてもよく似ています。

昨年12月には同合唱団代表の高校生3人にもロパ・ムドラ学校を訪問していただき、日印の子どもたち同士のわらべうた交流を図り、今までにない日印の草の根の文化交流を図りながら、新たな支援の形を探ることを目的としています。この交流によって、インドの子どもたちには音楽を通じて学ぶ楽しさを感じ取ってもらい、日本の文化、奈良の風習などを学んでいただきたいと思います。

そのときの様子は動画サイトのYou Tube上に掲載しておりますので、「奈良 わらべうた」をキーワードに検索していただくと一連の動画が表示されます。どうぞご覧ください。

今後に向けて

AIV設立以前から活動していた南インド・カルカラでの石彫事業の素晴らしさを奈良に紹介することによって生まれた現地インドでの交流の実績を糧に、インドの良さを奈良県の地方公共団体と協働しながら伝えていくことを考えています。それを実践するため、現在は観音菩薩の功德を表した観音経絵図制作を通じてムンバイ在住インド人画家による絵画の素晴らしさを宣伝することを企画しており、それによって日印文化の共通性とインド芸術の素晴らしさを感じていただくことを目的としています。特に奈良はシルクロードの終着点であり、これらの絵図を現代の奈良で発表することは意義深いことと考えています。